

令和3年度 露地栽培ぎく(小ぎく、輪ぎく、スプレーギク)展示栽培概要

1 展示内容

(1) 展示品種数

	育成元	7・8月咲品種	9月咲品種
小ぎく	イノチオ精興園	15 品種	11 品種
	山手秀芳園	10 品種	11 品種
	県内主要品種、県育成品種	9 品種	—
スプレーギク	イノチオ精興園	23 品種	20 品種
	山手秀芳園	5 品種	3 品種
輪ぎく	イノチオ精興園	—	—
	山手秀芳園	8 品種	6 品種

(2) 技術実証(小ぎく、スプレーギク、輪ぎく共通)

ア 7～8月咲品種

処理	処理日・処理期間	処理方法
エテホン処理	5月7日、5月17日	500倍液、2回処理
電照	4月30日～6月15日	暗期中断処理5時間(22～3時)

※ 9月咲品種は季咲きのみ

(3) 耕種概要

ア 作業実施日

	7・8月咲品種	9月咲品種
挿し芽	4月15日	5月12日
定植	4月30日	5月28日
摘心	5月6日	6月7日

イ 栽植様式

床幅80cm、条間40cm、株間10cm(小ぎく)、8cm(スプレーギク、輪ぎく)、通路100cm、2条植、株当たり3本仕立て

ウ 施肥

基肥：堆肥100kg/a、窒素・リン酸・カリ成分量各1kg/a

追肥：なし

エ その他

いずれの作型も、挿し芽から定植まで5時間暗期中断処理実施

2 生育概要

(1) 7・8月咲品種

ア 育苗期

一部品種で苗冷蔵を約2週間行ったため、冷蔵中の葉の傷みが散見されたが、挿し芽に支障のない程度であった。挿し芽後は、4月下旬に気温の低下がみられたものの、約2週間で定植適期苗となり、病虫害の発生もなかった。

イ 定植～生育初期

定植直後に1週間程度低温で経過し、降雨が少なく乾燥気味だったことから、活着及び初期生育の遅れがみられた。5月中旬以降気温が高温傾向で推移し、適度な降雨もあったため、生育の遅れは回復した。

ウ 生育中期～開花期

6/4と6/24に記録的な豪雨となり、圃場が長時間冠水した。6/24以降急激な下葉枯れが圃場全体でみられ、とくに低い場所など滞水しやすいところほどその傾向が著しかったことから、長時間の滞水による萎凋症状と考えられた。その後、液肥の葉面散布を1週間に1回程度行って草勢の回復を試みたが、十分な効果は得られなかった。開花期までその影響が残る株も多く、下葉の黄化・枯死や短茎開花がみられた。

6月～7月上旬までは比較的生育適温で推移し、乾燥時に灌水を励行したこともあり、生育は前進傾向となった。7月中旬以降は高温が続いたものの、既に着蕾期に到達していた品種が多かったこと、夕立ちによって夕方以降涼しい日があったこと、継続して灌水を励行したこと等により、高温による開花遅延の影響は少なかった。ただし、開花後早期に花卉が萎れる品種があり、傾向として小ぎく及び輪ぎくよりもスプレーギクが多かった。この原因としては、日中の高温による影響が考えられた。

病虫害については、病気は全般に少なく白さび病の発生もみられなかった。一方、害虫は多発傾向にあり、アブラムシ類やアザミウマ類の発生がみられたが防除で対応した。

(2) 9月咲品種

ア 育苗期

気温が高い時期であり、約2週間で定植適期苗となったが、やや過湿管理としたため、一部品種で白さび病が発生した。

イ 定植～生育初期

気温が高い時期で、さらに適度な降雨や灌水の励行によって活着は順調だったが、上述のとおり6月に入って2度の冠水が影響し生育が停滞した。7・8月咲品種のような極端な萎凋症状はみられなかったものの、その後の生育にも影響がみられた。

白さび病は苗からの持ち込みによって定植後も発生が続いたが、発病葉の除去と有効薬剤の防除によって抑制された。

ウ 生育中期～開花期

長時間滞水による草勢低下と日中の高温による影響で、全体的に草丈は短い傾向であった。また、9月咲は季咲き栽培のみで開花調節を行っていないため、スプレーギクを中心に本来の開花特性によって早期開花している品種が多くみられた。

病虫害については、生育中期までは7・8月咲品種と同様の傾向であった。開花期前となる9月上旬にオオタバコガの食害がみられたが、有効薬剤の防除によって抑制された。